

令和元年6月4日現在

機関番号：17401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12913

研究課題名(和文) 感受概念の言語化に注目した教育実習生の実践知獲得プロセスの研究

研究課題名(英文) Preservice Teachers' Acquisition of Practical Knowledge through Teaching Practica: Qualitative Research on the Verbalization Process of 'Felt Sense' in TAE-Based Reflection Activities

研究代表者

長嶺 寿宣 (Nagamine, Toshinobu)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・准教授

研究者番号：20390544

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：教師成長には、実践的知識(実践知)の獲得が不可欠である。しかし、特に教職経験に乏しい実習生にとって実践知を言語化することは容易ではない。本研究では、授業実践を通して実習生が得た「感受概念」(直感的・無意識的に形成されるもの)に焦点をあて、それを言語化するプロセスを調査した。感受概念の言語化をガイドするため、Thinking At The Edge (TAE)と呼ばれる手法をリフレクション(振り返り)活動に取り入れ、そのプロセスを分析し、実践知の獲得プロセスを解明した。本研究を通して、実践知の獲得プロセスには、認知的因子のみならず様々な情動・感情的因子が複雑に絡み合っている実態が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本人英語教師を取り巻く環境は大きく変化した。客観的に観察・評価可能な語学力、それが顕著に表れる「英語のみを使用した」授業実践のみで、資質や技能が議論されることも少なくない。また、英語教育改革に伴い蔓延しつつあるネイティブ・スピーカー至上主義が、自己肯定感や自己効力感を低下させる傾向も見られる。本研究では、実践知の獲得プロセスに関与する「理想の教育者」等の信念に関わる因子が多数観察されたが、英語の指導法や教師の語学力に関わる因子は極少数であった。英語教員養成の在り方や指導アプローチを検討する上で示唆に富む知見を含んでおり、リフレクション活動を通して教師成長を促す手立てが具体化できる。

研究成果の概要(英文)：Teachers should be trained and educated with much emphasis on practical knowledge. Unlike theoretical knowledge, however, it is hard, if not impossible, to verbalize personal practical knowledge, which often makes it difficult for teachers to efficiently share practical knowledge in their communities of practice. We, therefore, opted to focus on pre-service teachers' felt sense (i.e., a combination of emotion, awareness, intuitiveness, and embodiment) perceived during teaching practica, and to investigate the process of verbalization of felt sense by analyzing three data sets: interviews, English poetry writing, and autobiographical narratives. Major research findings include, but not limited to, the identification of affective factors that interact with and/or influence cognitive factors in the acquisition process of practical knowledge, the nature of teacher reflection, and the feasibility of Thinking At The Edge (TAE) incorporated into reflection activities.

研究分野：応用言語学・英語教授法

キーワード：英語教師 教師成長 教育実習 実践的知識 リフレクション 情動 感情 認知

1. 研究開始当初の背景

教師の成長には、実践的知識（実践知）の獲得が欠かせない。しかし、講義や教科書等から得られる理論的知識と異なり、教師（特に、教職経験が乏しい教育実習生や新米教師）にとって、暗黙知として知られる実践知を意識化し、言語化することは容易いことではない。今日、実践知を重視した教員養成カリキュラムや教員研修が求められているが、教育実習時に英語科の教育実習生が獲得する実践知やその獲得プロセスの詳細は解明されていない。実践知の獲得プロセスを解明することにより、教員養成・研修のあり方を検討する際の有用な知見が得られるはずである。

実践知を意識化し、言語化するための有効な手段として、リフレクション（振り返り・内省・内観）活動が挙げられる。近年、リフレクションの重要性が認められている背景には、90年代半ばから否定され始めた「教師の学び」と「教師成長」についての誤った考え方がある。それは、「教師の学び＝文脈から切り離された教師行動の模倣」、あるいは「教師成長＝客観的に観察・評価可能な教師行動の変化」という考え方であった。むしろ客観的に観察・評価することが難しい教師の内的変容こそが重要であると認識され始め、「教師の学び＝キャリアを通じた主体的探求」、もしくは「教師成長＝認知・情動面における持続的な変容が成熟した意思決定（informed decision making）に繋がること」と認識されるようになった。したがって、教員養成や現職教員研修の場において、教師による主体的な探求を促すアプローチが模索され始めた。リフレクションは、教師の内的変容を促す有効な手段として注目されている。

しかし、リフレクションの定義や効果については研究者間で意見が分かれており、具体的にどのようなリフレクションが授業実践の変化に繋がるのか、そもそもリフレクションの成果は授業実践に現れるのかといった事柄については、十分な検証が行われていない。特に日本における英語科教育実習生を対象とした調査・研究の事例は極めて少ない。そこで本研究では、授業実践を通して教育実習生が得た「感受概念」（主に心身の感覚を通して直感的・無意識的に形成されるもの）に焦点をあて、それを言語化するプロセスを調査することにした。リフレクションを通して感受概念の言語化をサポートするため、Thinking At The Edge (TAE)と呼ばれる心理療法に用いられる手法をリフレクション活動に取り入れ、そのプロセスを質的に分析し、教育実習生の実践知獲得プロセスの解明を試みた。本研究で採用したTAEのステップを図1に提示する。TAEとは、感受概念の意識化、具象化、言語化を促すための手続きを体系化した心療カウンセリング（フォーカシング）の手法である。人間が心身の感覚を通して無意識のうちに形成する感受概念を、3つのパート（Part 1: 5ステップ; Part 2: 4ステップ; Part III: 5ステップ）から成るエクササイズを通して、「本人が最もじっくりくる言語表現」を探し出すことができる。

	Part I: Steps 1-5	Part II: Steps 6-9	Part III: Steps 10-14
Purpose	Speaking from the felt sense	Finding patterns from facets (instances)	Building theory
Form	Grasp form, Deepening Form, etc.	Pattern Extract Form, Intersect Form, etc.	Term Relating Form, Term Searching Form, etc.
Result	One's Own Sentence	Multiple Patterns	Conceptual System

図1 TAEのステップとエクササイズの内容

2. 研究の目的

本研究は、研究者参加型のエスノグラフィック・デザインを基底とする定性的研究として実施した。つまり、研究者が被験者の学びの場（learning communities; communities of practice）に足を踏み入れ、TAEを導入した上でリフレクション活動を実施し、信頼関係を構築・維持しながら被験者の学びと成長のプロセスを調査する研究である（図2参照）。

本研究の目的は次の通りである。

- (1) 感受概念の言語化を促すリフレクション活動で顕在化する実践知の実体を明らかにする。
- (2) 感受概念の言語化を促すリフレクション活動で顕在化する実践知獲得プロセスを明らかにする。
- (3) 感受概念の言語化を促すリフレクション活動の実現可能性（feasibility）を検証する。

また、研究成果を基に、実践知の言語化と共有化に効果的なリフレクション活動や英語科における教育実習時の実践知獲得に資する支援・指導の在り方を複眼的に検証することも視野に入れた。

なお、本研究は、研究代表者1名と研究分担者2名の計3名による研究組織で遂行した。

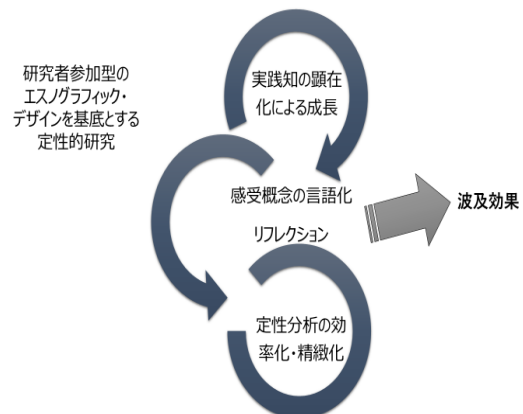


図2 研究デザイン

3. 研究の方法

本研究の被験者は、大学の英語教員養成課程に在籍する教育実習生 6 名である（うち 1 名が平成 28 年 4 月 14 日夜及び 4 月 16 日未明に発生した熊本地震の影響により辞退）。平成 27 年度に、研究代表者による研究体制確立と被験者選出を行い、研究分担者との理論研究を行った。暗黙知として知られる実践知と教師認知の探求方法として注目されているリフレクション活動の概念化とリフレクション活動の手法と効果についての文献調査である。加えて、様々な暗黙知（身体知、実践知など）の可視化・言語化に有効とされる TAE についての哲学、教育学、心理学、臨床心理学、看護学、社会学等の分野における研究動向と学術的議論の動向を調査した。また、研究分担者 2 名は、それぞれ物語分析 (narrative analysis)、ライティングとリフレクションの関係性、自伝的記憶と教師成長の関係性について理論研究を進めた。さらに、徴集した被験者 6 名のうち 1 名を任意に選び、パイロット・スタディを実施した。その際、過去の英語学習経験を中心に教師を志望するに至った経緯を日本語で作文させたテキスト・データ (autobiographic narratives)、過去の授業実践経験についての英語詩のテキスト・データ (L2 poetry)、日本語による個別インタビュー・データの三種に対して定性分析を行った。個別インタビューは、教育実習の前後に 90 分のセッション（質問が事前に準備されているインタビュー）を 2 回、TAE を取り入れたリフレクション活動実施期間および実施後に 60 分のセッション（事前に質問が準備されていないインタビュー）を 4 回実施した（全て IC レコーダを用いて録音）。定性分析の手法は、インタビュー・データについては研究代表者がグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach : GTA) を使用し、研究分担者 2 名は、自伝的物語分析 (autobiographical analysis) と詩の内容分析 (L2 poetry analysis) を援用しテキスト・データの分析を行った。これらの分析結果・解釈を研究者全員で検証・議論し、定性分析手法の妥当性と分析結果の整合性の確認を行った（複合調査 : data triangulation）。平成 28 年度以降は、研究代表者と研究分担者による理論研究を継続しつつ、パイロット・スタディの手続きを踏襲する形で、各種データを被験者 6 名全員から収集した（震災後に辞退した被験者データは破棄）。被験者全員に対して TAE に基づいたリフレクション活動（ワークショップ形式）を実施し、教育実習時の授業実践経験に関わる感受概念の自覚化、顕在化、言語化に取り組みさせた。TAE によるリフレクション活動期間および事後に、被験者全員に対する個別インタビューを実施し、当該研究の最終年度まで、データ分析・解釈作業を継続した。定性分析の手法とデータ分析結果・解釈の検証方法はパイロット・スタディを踏襲した。

4. 研究成果

本研究では全被験者に TAE に基づいたリフレクション活動を実施し、教育実習（授業実践）の振り返りを行わせた。TAE のステップを踏みながら、授業実践経験を振り返り、被験者は心身の感覚を通して直感的に捉えた「なにか（言葉では表現しづらいが気がかりなこと）」を意識し始め、適切な、本人が最もじっくりくる言語表現を探求した。その探求を行った際の着眼点は、全被験者に共通して、授業実践中に経験した「ネガティブな事象」であった。児童・生徒の反応が悪いと感じた時、教師の発話がまとまっておらず指示が不明瞭だったと感じた時、児童・生徒の発話に対してうまく返答、もしくは対応することができなかつたと感じた時など、教師本人にとって負の感覚を抱かせた事象が探求の出発点になっていた。被験者が、教職実践経験に乏しい教育実習生であり、成功体験を積み上げた経験豊富な教師ではないことが一因として考えられるが、授業実践の成功事例を経験しているにも拘わらず、ネガティブな事象に着眼したことは興味深い。また、ネガティブな事象に着眼した背景にある理由を探ると、教師の語学力や授業実践方法（指導テクニック等）の知識・技能不足にあると認識されておらず、被験者が自覚できない隠れた要因の存在が示唆された。リフレクション活動を通して、被験者本人が初めて自覚した要因（たとえば「影響力のある他者」（被験者の親【理想の教師像】）が絡んでおり、その隠れた因子が様々な心理的变化（不安感の上昇、自己肯定感の低下、ネガティブな自己評価、自己効力感の低下）を生じさせていることが明らかとなった（図 3 参照）。

TAE に基づいたリフレクション活動を通して観察された実践知の獲得プロセスには、被験者の認知的因子（思考、信念、意思決定等）に加えて感情・情動を範疇とする様々な因子が社会文化

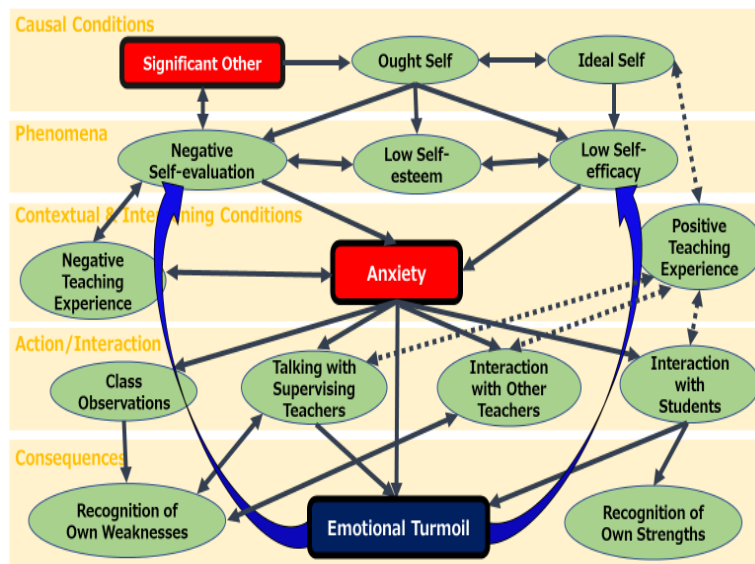


図 3 GTAによる分析結果（被験者 1 名）

的な外的因子と複雑に絡み合っていた。教師としての成長に不可欠とされるリフレクションを通して実践知を顕在化させるには、経験に付随する感情・情動的因子を意識的に探求することが重要であり、その際、心身の感覚を通して形成される「感受概念」を基に言語化することが効果的であることが確認できた。

「授業実践を振り返り経験から意味や意義を見出す行為」は単なる認知的活動ではなく、感情・情動的活動であるともいえる。換言すれば、リフレクション活動は、高次の思考（批判的思考や帰納・類推思考等）のみを要する認知的活動ではなく、自身や他者の感覚・感情・情動を敏感かつ的確に読み取り、適切に処理する能力を要する活動といえよう。

実践知は、心身の反応を伴う主観的経験と密接に関係している。被験者が授業実践時に形成した「感受概念」は、大別すると教師としてのあり方や教育のあり方に関わる「教育的信念」に起因するものと、特定の文脈・状況に依存した「即興的判断」に起因する周辺的なものが観察された。授業を振り返る際に、実践知の具象化（reification）が適切に行われるか否かは、教師の心的態度（自身の認知および感情・情動と対峙する姿勢）が決定づけている。この心的態度については、注意が必要である。新米教師や教育実習生が、単独でリフレクションを行う場合、ある程度リスク（教師としての自身の適性を疑うネガティブ思考、自尊感情や自己肯定感の低下、職業的自己同一性の揺らぎ等）を伴う可能性が示唆されたため、心的態度に配慮し、適切にリフレクションをガイドする手立てが必要である。教師教育者（大学の教員等）は、理論的知識の教授と実践的な指導力を身につける場を提供するだけでなく、必要に応じてカウンセリングを行う役割も担う必要がある。心理療法に用いられる TAE を援用したリフレクション活動は、教育実習生が「なんとなく気になっていること」、「もやもやして気がかりなこと」、「なぜか分からないが負の感覚が拭えないこと」を探求する行為をサポートする一つの選択肢として、先述の心的態度に関わるリスクを回避、もしくは軽減し、教職に就こうとする意欲の維持・向上に寄与する可能性がある。

近年、日本人英語教師を取り巻く環境は大きく変化した。客観的に観察・評価可能な語学力、それが顕著に表れる「英語のみを使用した」授業実践のみで、資質や技能が議論されることも少なくない。さらに、英語教育改革に伴い蔓延しつつあるネイティブ・スピーカー至上主義が、自己肯定感や自己効力感を低下させる傾向も見られる。本研究では、実践知の獲得プロセスに関与する「理想の教育者」等の信念に関わる因子が多数観察されたが、英語の指導法や教師の語学力に関わる因子は極少数であった。英語教員養成の在り方や指導アプローチを検討する上で示唆に富む知見を含んでおり、リフレクション活動を通して教師成長を促す手立てが具体化できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- (1) Fujieda, Yutaka. (2018). Reflecting on a professional teacher's path: An autobiographical account. *Explorations in Teacher Development*, pp. 33-34. 査読有
- (2) Iida, Atsushi. (2016). Second language poetry writing as reflective practice: A poetic inquiry into a pre-service teacher's experience of English language learning. *Language Teacher Cognition Research Bulletin 2016*, pp. 81-93. 査読有

〔学会発表〕（計14件）

- (1) 長嶺 寿宣・藤枝 豊・飯田 敦史 (2018). 「実践知の言語化に関する一考察：リフレクション活動へのアプローチを探る」 第34回 JACET SIG 言語教師認知研究会 研究発表会（熊本大学）
- (2) 長嶺 寿宣 (Sept, 2016). 「Teacher Research を再考する：教師の「こころ」と「からだ」に焦点をあてて」学英語教育学会第55回（2016年度）国際大会 JACET 言語教師認知研究会企画シンポジウム「英語教員養成におけるティーチャー・リサーチのあり方」（笹島茂・千葉克裕・長嶺寿宣・飯田敦史）（北星学園大学）
- (3) Iida, Atsushi, Fujieda, Yutaka, & Nagamine, Toshinobu. (Sept, 2016). *Exploring pre-service teachers' practical knowledge to promote innovative and creative pedagogical approaches*. Paper presented at the 63rd TEFLIN International Conference, the University of PGRI Adi Buana, Surabaya, Indonesia.

〔図書〕（計3件）

- (1) 長嶺 寿宣 (2018). 「Reflecting to learn from experience: Issues of teacher cognition and affect」(pp. 358-368) 『ことばを編む』(430頁) 西岡宣明・福田稔・松瀬憲司・長谷信夫・緒方隆文・橋本美喜男（編）開拓社
- (2) Nagamine, Toshinobu, Yutaka, Fujieda, & Iida, Atsushi. (2018). The role of emotions in reflective teaching in second language classrooms: Felt sense, emotionality, and practical knowledge acquisition (pp. 145-163). In Martínez Agudo J. (ed), *Emotions in second language teaching: Theory, research and teacher education* (449 pages). Springer, Cham.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究分担者氏名：長嶺 寿宣

ローマ字氏名： Toshinobu Nagamine

所属研究機関名： 熊本大学

部局名： 大学院人文社会科学研究部

職名： 准教授

研究者番号（8桁）： 20390544

(2) 研究分担者

研究分担者氏名： 藤枝 豊

ローマ字氏名： Yutaka Fujieda

所属研究機関名： 共愛学園前橋国際大学

部局名： 国際社会学部

職名： 教授

研究者番号（8桁）： 60406288

研究分担者氏名： 飯田 敦史

ローマ字氏名： Atsushi Iida

所属研究機関名： 群馬大学

部局名： 大学教育・学生支援機構

職名： 准教授

研究者番号（8桁）： 50622122

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。